京都音楽博覧会 IN 梅小路公園

野外フェス＝ラウドなロックでいいのか？「くるり」が提案する京都の野外フェス。

7月に太陽が丘で開催予定だった10-FEETによる野外ロックフェス「京都大作戦」は、台風により無念の開催中止。でもまぁ、フジロックも一発目は台風直撃で中断＆中止になったことを考えれば、後々語り草になるだろうし、来年のリベンジに期待したいところ。

さて、今年は京都を舞台にした野外フェスがもうひとつ。くるり主催による「京都音楽博覧会 IN 梅小路公園」、通称「オンパク」である。こちらはモッシュ＆ダイブなフェスとは違って、アイリッシュやジプシー、琉球民謡など博覧会の名に相応しいボーダーレスなラインナップで、画一化しがちな野外フェスに一線を引いたアプローチが特徴的。加えて、近隣住民ともコンセンサスを図り（この点、主催側の尽力には頭が下がる思いです）、梅小路公園というパブリックなスペースでフェスを実現するあたり、これこそが本当の都市型フェスなのではないかと思うわけです（京都駅から徒歩15分ってことも含めて）。

「休日の散歩がてらに音楽でも聞きにいこかなぁ～」くらいの気分で参加できて、目当てのアーティストのために必死で場所取りするわけでもなく、ぼけぇ～っと音楽に浸れるフェス…って、なんとなく京都の空気感にハマっている気がするんですよねぇ。個人的にはJason Falknerを遠くから眺めつつ、ビールをグビグビっとやりたいところです。

（坂東寛士／本誌）

■京都音楽博覧会 IN 梅小路公園
■2007.9.23（Sun）
■OPEN11:00／START12:30
■6800円
チケットぴあ（0570・02・9999、Pコード：263-827）
ローソンチケット（0570・084・005、Lコード：58888）
■京都梅小路公園・芝生広場
■出演：くるり、Jason Falkner、Liadan、Taraf de Haidouks、大工哲弘＆カーペンターズ、ふちがみとふなと、and more
■問い合わせ：0180・99・6611
（京都音楽博覧会 事務局／24時間テープ対応）
http://www.kyotoonpaku.net/

街場の演算

肩の力を抜いて、自由に語ろう…、京の街と付き合うということを。

文／袖岡保之

【第一回】

三条会商店街を「チャリ」で飛ばす人を見ながら考えたこと

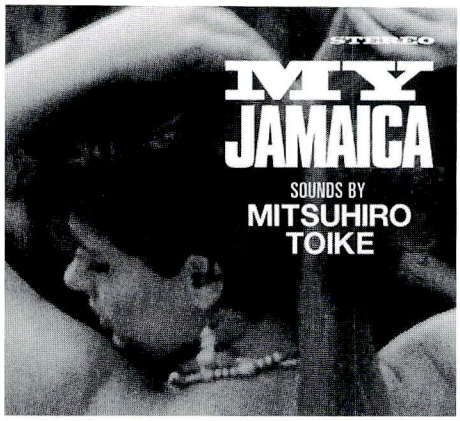
「京都の街に生きる」ということは、「世界中の文化をつまみ食いしながら生きている」ようなものだ…ということ。

「京都はややこしい」と、人は言う。それは歴史の中で培われてきた、いわゆる抜き差しならない家や人間の関係性であったり、職やその人の様の中で規定されてきたりしてできたものである。

しかし、学生時代やモラトリアムな時間を京都で過ごすことで、一気にその感覚の距離が縮まるのも確かなことである。気軽に住んでみると京都という街（や人）は意外に恐くないし、街場での暮らしは郊外型の新興住宅地なんかよりかなり快適だし、ラクチンである。学生時代にちょっとだけでも京都に住んだことのある人や、仕事で京都に来た人などを見ていると、京都順応力の高い人は結構多い。

そして、順応すればするほど、京都にほだされて「ややこしさ」が見えてくるのだ、これが…。

そんなことを思ったのも、7月に新しい事務所を構え（この原稿もそこで書いています）、三条会商店街を行き交う人を眺めながら、「祇園や三年



MITSUHIRO TOIKE (DRY & HEAVY) Album Release tour

LIVE 9.29 (Sat)

きっと酒が美味くなる、秋レゲエ。優しさ満開のGOOD VIBESをどうぞ。

夏嫌いということもあってレゲエ知識は人並みだが、これまで出会ってきたKads MIIDAやSHANDI-I、店ならRUB A DUB…、レゲエ界（と、それに近いところ）にいる人たちはものすごく魅力的だったし、今も大好きである。

DRY & HEAVYという日本有数のレゲエ・バンドがあって、外池満広さんはキーボーディストを務めている。去る6月にソロアルバム「MY JAMAICA」をドロップ。一枚通して、とっても優しい。気が抜けるぐらい優しい。アナログ／ヴィンテージ楽器のコレクターでもあり、フェンダーローズ（も使ってると思う）がまた優しい。レゲエもハードからソフトまで色々で、でもそのルーツには結構タフなもんが必ず収まっている。音が優しいのは、この人が強い良い人だからだと思う。そのリリースツアーは、トンだりハネたりが好きな人には向かないかもだが、酒は美味いはず。絶対。

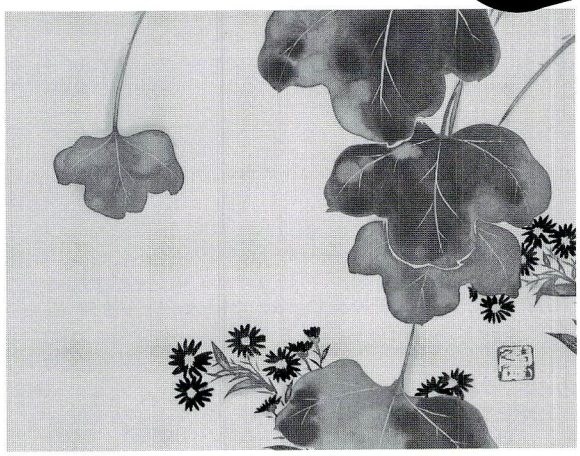
（竹中　聡／本誌）

■「MITSUHIRO TOIKE Release tour」　■2007.9.29.（Sat）
■NAiNOA
京都市中京区蛸薬師通麩屋町東入ル蛸屋町157番地
■OPEN／START 19:00〜
■前売り2500円／1ドリンク　当日2500円
■問い合わせinfo@shimomura-onkyo.com（下村音響株式会社）
075・212・1311（NAiNOA）
http://www.shimomura-onkyo.com

琳派展×神坂雪佳

ART 9.22〜 (Sat)

元祖・和のデザイン、琳派を明治時代に受け継いだ画家。



近頃マダム雑誌がこぞって取り上げる「琳派」。これは特定の流派をさすのではなく、デザイン性を重視した近世日本美術の系譜。尾形光琳の時代にピークを見るが、神坂雪佳は明治時代に琳派を名乗り、琳派を復活させた画家。時はアール・ヌーヴォーがもてはやされた時代。雪佳も海を渡って洋のアートの洗礼を受けたが、迎合はしなかった。渡航の船上で描いたと言われる波の図案集「海路」では、日本の意匠の中にモダンを取り込んだ新境地を見せた。

雪佳は当時流行していたポンチ絵のような作品も手がけ、洋の図案をパロってしまう力技を披露。そこには、デザインといえば舶来ものに平伏する我々とは別格の自信とオリジナリティがある。そのルーツが雪佳から遡ること200年の尾形光琳、さらに100年遡る本阿弥光悦なのだから、つくづく、日本デザインはグレイトだ。

（沢田眉香子）

■「琳派展×神坂雪佳」　■細見美術館
■2007.9.22（Sat）〜12.16（Sun）　■13:30〜／START
■一般1000円　学生800円　■問い合わせ075・752・5555

坂なんかで逢う観光客的『2人だけの世界』的ベタカップルや、左京区系かまやつギャルではなく、普通に京都の街場を愉しんでいるというか、京都の文化性そのものを内部にしっかりと取り込んでいる学生さんが結構いるやん…」と感じたからである。

実際、立命館や同志社はじめ、京都の街なかから一旦は「よそ」へ出て行った大学（の一部の学部）が、再び京の街での講義を増やすのがトレンドのようであるし、ビッグコミック・スピリッツには、京大の院生のこれまたよ〜わからん漫画（『京大M1物語』）の連載が始まっていたりする。

そんな学生だけでなく、京都の街や人と何らかの形でコミットしていくことは、街場の雑誌をやっていて何であるが、とても重要なことなんじゃないだろうか？

そう思うのは、京都が巨大な田舎であるとともに、何かを買うとか、飯を食べるとかの用事をすませるだけでなく、「世界中の文化をつまみ食いしながら生きている街」だからである。

まさに今回特集でクローズアップしている烏丸は、大学の動き同様に、北山から「COCON烏丸」に移ってきたαステーションや京都シネマの存在が、（買い物などしなくても）表を歩くだけで楽しい（それ は何故か？ は、また今度…）四条通のルイ・ヴィトンとともに、とても京都らしいと感じるエリアである。なぜならば、室町や新町、はたまた四条、錦という通を格子状にクロスオーバーする四条烏丸周辺こそ、祇園祭という京都の文化的特徴を精神的支柱にしながら、観光という「日本らしさ」というドメスティックなナショナリズムだけではなく、歴史の時間軸の中で「世界中の文化をつまみ食いしてきた」場所だから、ではないだろうか。